

グリーンの哲学

行 安 茂

はじめに

グリーンの「倫理学序説」の第一編「知識の形而上学」の第一章は自然と精神的原理との関係を問題にしている。かれが自然をとりあげ、これを哲学の問題としたのはどのような理由によるのであろうか。第一編「知識の形而上学」というタイトルから推察されるように、それは知識の成立過程を明らかにするためであったとみることができる。知識という以上、知る主体と知られる客体とが考えられる。自然は知られる客体としてみられる。しかし自然をより深く知るためには知る主体としての自我そのものが理解されなければならない。このようにみえてくると、自我は哲学的にはどのような作用をもっているのであろうか、ということが問われなければならないことになる。われわれがものを知る場合感覚によってまずそれをとらえる。ヒュームはこれを印象ともよんでいる。知る主体としての自我はこの場合感覚的自我である。しかし感覚だけによって得られた知識は確実であるといえるであろうか。諸々の感覚経験はそれだけでは知識となりにくいようにみえる。それらを組織的に結合する統一原理がなければ、それらの経験は断片的になり、時間・空間を通して妥当する知識とはならない。グリーンもこのような疑問をもって知識が成立する過程を思索する。われわれはかれの問題が何であるか、かれはこれをどのように解決しようとしたかをみることによってわれわれの哲学的思考を一步前進させなければならない。

I 自然と意識

グリーンは自然をどのように考えたであろうか。われわれは自然といえば、山川草木を考えやすい。また Human Nature という語から推察されるように、人間本性も自然であるといえる。あるいは「自然法」(law of nature) とよばれるように、自然を法則としてみる考え方もある。われわれは通常自然と人間とを対立的に考える。グリーンもこのように考えているようである。かれは自然と精神的原理とを区別している。しかもこの区別をグリーンは強調しつつ、自然を秩序あるものとして考える。この点が理解され難いところである。グリーンは自然を二通りに考える。その第一は「自然とは変化の過程である」⁽¹⁾ とか「絶えざる変化の過程としての自然」⁽²⁾ という言葉に求められる。確かに自然は変化する。たとえば山川草木によって表現される自然は春夏秋冬と共に変化し、何一つとして停滞するものはない。すべてこれらのものは変化である。万物はまさに刻々と変化し、運動している。人間自身も時間と共に変化する。変化する過程が自然であるとすれば、自然は時間であるといってもよいようにみえる。時間は刻々と変化し、流れているからである。

自然についての第二の考え方は自然を秩序ある体系とみることである。「自然は関係した諸現象の体系である」⁽³⁾ とか「自然の秩序」⁽⁴⁾ とか「自然の斉一性」⁽⁵⁾ とかいうのがそれである。

「斉一性」とは「変らないこと」(unalterableness)を意味する。これは不変の法則に通ずるものとみられる。自然は絶えず変化するが、その中にあって変らない法則が貫いているとみるのがこの第二の考え方である。この意味における自然が real なのである。以上の考察からしてわれわれはグリーンにおいて自然が reality と appearance との二面において考えられていることを知ることができる。われわれは最初から自然を秩序ある体系とみることはできにくいように思う。自然が秩序としてみられるのはわれわれが自然を十分認識することができた後のことであろう。でなければ自然が秩序をもっているのか無秩序であるのか、この区別はできないはずである。自然が秩序として且つ斉一性として考えられる限り、それは事物や事件が相互の関係において知られた結果であるといえよう。そこで、問題は知る主体がどのような作用をもっているか、それは知識をどのようにして成立せしめているか、といった問いにしばられてくるように見える。ロックやヒュームは感覚や印象を主張することによって、これを知識の源と考えた。グリーンはこれを問題にとりあげ、かれらの思想を批判することによってかれ独自の「知識形而上学」を展開するのである。

グリーンにおいては自然はどのようにして知られるのか、さきにわれわれは自然を秩序ある体系としてみたが、これは「結合された諸現象の体系」⁽⁶⁾ともいいかえられている。体系としての自然は諸現象が結合されていることである。それは何によって可能となるのか、この問いは諸現象を結合する原理は何であるかということを含んでいる。現象は個々ばらばらであるともみられるし、一定の法則によって互いに結合されているとみることもできる。グリーンは諸現象を結合する原理を「意識」と考える。自然は「意識に関係した事実」⁽⁷⁾といわれるのがそれである。意識は云わば扇の要である。これが中心として予想されないならば一切の現象は互いに関係のない、個々ばらばらの断片的現象にすぎないことになる。グリーンの立場に立って考えるならば、ヒュームの印象(グリーンはこれを感情 feelings という語の中に含める)によっては諸事実は「関係」(結合された関係)とならない。何となれば関係は感じられるものではなくて思惟された産物であるからである。また感情は一瞬間であり、過ぎ去ってゆくものであり、従ってそれは継起的であるから、「われわれがわれわれ自身をそれに適応させなければならぬところの一世界を形成しないであろう」⁽⁸⁾。グリーンは the successiveness or transitoriness of feelings と云っているが、この意味は感情が固定しないで、絶えず変化し、流動しやすいものであるということである。ヒュームの印象がこのように理解され得るかどうかは尚検討を要するであろうが、グリーンの立場に立って考える限り、ヒュームの印象によっては自然は秩序ある体系として知られ難い。そこでグリーンは印象以外の「あるもの」を考え、これが「関係」(結合された諸現象間の関係)を構成(思惟による積極的作用)するということのである。「諸関係 それらは考える意識にとってのみ存在し、他の仕方では存在しない」⁽⁹⁾。これからわかるように、「あるもの」とは「考える意識」であることがわかる。何となればこの意識によって諸関係が成立するからである。

では関係⁽¹⁰⁾は「考える意識」(グリーンはこれを「ある主体」ともよぶ)によってのみ構成されるのであろうか。そこには感覚、感情、印象の作用は全く必要がないのであろうか。グリーン

は純粹の意識のみを考えているのであろうか。「感情と思惟とは経験の世界が存在する意識においては分離することはできないし、且つ相互に依存しており、あの意識の対象を形成する事実の構成においては分離することはできないし、且つ相互依存的である。」⁽¹¹⁾ これをみると、「考える意識」は感情として包括されている感覚や印象を含んでいることがわかる。意識は思惟と感情とから構成される混合体のように見える。そうであるとすれば意識の世界においては思惟が中心であるのか、感情が中心であるのか、あるいは両者は対等であるのか、区別が非常に困難となってくる。感情は絶えず変化し、流動的であるから、これが現象と現象とを結合することによって何らかの関係を発見することは困難である。グリーンもこの点を認めている。といって感情や印象を除外した意識は抽象的意識となって、事物を real にとらえることはできない。グリーンが「感情と思惟とは経験の世界が存在する意識においては分離することはできない」というとき、かれは思惟を独立した中心とみなし、これは感情から区別され、感情から独立しているが、それにもかかわらずこれに働きかけてゆく積極的作用をもつものとする。ただ、思惟という語はグリーンにおいて単なる思考作用という意味にとられやすく、統一原理としての意識の意味に必ずしもとられない。そこでこの両者を区別するために意識という語は区別と統一の意味をもち、これが思惟の背後にある独立した中心原理をなしている。

知識形而上学を追思考してゆけばゆくほどわれわれは「意識」とは何であるかという困難な問題をとりあげざるを得ない。グリーンは意識を「自己識別意識」(self-distinguishing Consciousness)ともいいかえている。これは「事実と空想、客観的実在と主観的錯覚との区別」⁽¹²⁾をなす意識である。あるものを実在とみるか錯覚とみるかはこのようにみる自我そのものの作用に依存しているから、問題はこの自我の意識構造の点に集中されなければならないように見える。そこで、グリーンは自我を空想や錯覚を起すような主観的自我(これは感情や印象によって左右されやすい)から区別する。自我を感覚的自我から区別するところに、自我を独立したもの、不変のものとする含みがある。かれは自我を二種類に分けて考えようとするわけである。われわれはこれを主体的独立的自我と表面的感覚的自我との二つの自我によって一応特色づけてよいのではないかと思う。

グリーンの意識は区別する作用の外に統一作用、結合作用を含む主体である。かれはこれを Unifying Consciousness とよぶ。これは総合作用といいかえてもよい。これらの作用を起す源としての意識が自覚されてはじめて諸現象間の関係が認識される。たとえば「運動は同一の物体が連続的にとるいろいろな位置の総合から由来するものを除いては何ら意味をもたない」⁽¹³⁾といわれるように、意識は諸々の位置の関係を結合することによって運動を知る。同じことは因果関係についてもいえる。「原因はわれわれの経験の世界における諸変化の間の不要の結合——その世界がすべて変化するにもかかわらず、終始ある単一主体と関係をもつことがその基礎であるところの不変性としてでなければ何ら意味をもたない」⁽¹⁴⁾。グリーンはそれ自身変らないところの「単一主体」を考え、これとの関係をもつことによってはじめて経験界において関係(たとえば因果関係)を発見することができると思う。かくしてかれは変化と不変、時間と永遠という重

要な問題を提出していることがわかる。時間は変化であると考えられる。感情、感覚、印象は変化する。してみるとこれらは時間の一面を示していると考えられる。しかし自我は時間において瞬間的に変化し、過ぎ去ってゆくものであるか。それは時間を超えたものとして考えられる面をもっていないであろうか。グリーンもこのような疑問をもっていたようである。「時間にあるものとしての諸事件相互の関係はそれらが時間の中にないところのある主体にとって同じように現われることを含んでいる」⁽¹⁵⁾。諸事件は連続的に起り、それらの間の関係は必ずしも法則的ではない。変化する諸事件はこれらがいやすくも法則関係を含むものとすれば、変化しない、固定した中心原理を予想しなければ無意味な断片に終る。グリーンはこの原理を永遠的と考える。

II 意識の二重性

グリーンの「知識の形而上学」の課題は何であったか。その中心問題は、知識はいかにして得られるか、知る活動の源泉は何であるか、という問題である。そしてこの問題の解決は「意識」にかかっている。ところで意識は自己を感情から区別し、諸現象間の関係を確立することによって統一し、結合する機能をもっている。これらの言葉は自我の主体性と独立性とを示していると考えられる。人間の意識はこのような作用をもっているが、これのみが意識の特長であるだろうか。われわれの意識は絶えず変化し、流れており、決してそれ自身変らないところの独立性を保っているとはいえない。しかし他方、意識はすべて流動的であるにすぎないとのみいうこともできないように見える。われわれがグリーンにおいて「意識の二重性」を指摘するのもこうした意識の事実によるところもあるからである。グリーンは意識を二様に考える。第一に、「瞬間から瞬間へと変わり、連続し、そして各々の連続的狀態は『外的および内的』諸事件の諸系列に依存しているような意識」⁽¹⁶⁾が考えられている。グリーンはこの意識を「動物有機体の連続的変容」といっている。かれはこの意識を動物有機体としての人間の見地から変化するものとしてみている。従って感情、感覚、印象の線において意識が考えられているとみてよいであろう。このような意識は時と共に変わる。それは多くの場合外的諸事物からくる刺激によって感情が生ずるために変化しやすい。ヒュームがいう「原生的印象」によって意識に強弱、高低の波が生ずる。このような意識は必ずしも外的事物からくる刺激によるとは限らないこともある。それは自己自身から自然に起ることもある。ヒュームはこれに似たものとして「内省の印象」を考察した。このようにみえてくると、グリーンが考えている意識は感情や印象と相対的關係にあるようにみえる。

第二に、グリーンの「意識」は「永遠的意識それ自体」である。それは動物有機体の諸作用によって制限されるけれどもそれから独立した意識である。「動物有機体の連続的変容」としての意識は絶えず変化し、流動する感覚的意識であるが、永遠的意識は不変の意識である。永遠は時間に対していわれる語であるから、意識はこれら二つの角度から考察され得る。時間の線においてみられた意識は「動物有機体の連続的変容」であるとみることができる。この意識から独立した不変的自我が永遠的意識であるとすれば、この両者はどのように関係するのであるか。両者は全く別々であり且つ相互に無関係なのであるか。そうではないように見える。何となれば、

すでにわれわれは感情と思惟とは意識においては不可分離であることをみたからである。さらにまた、時間の中にある諸事件は意識にとって平等に共存するものとして（すなわち継起的に生ずるものでもなく、無関係に断片的に起るものでもなくて）受けとられるからである。推察するに、意識は諸事件の起るがままに流されるのではなくて、それらを対等に固定し、比較し、相互の関係を明らかにする中心意識である。これに立脚してはじめて諸事件は平等に且つ冷静に吟味され得るのである。でなければ諸事件や諸現象を固定して考えることができない。固定することができなければ、すなわち主客ともに動けば、諸現象を秩序ある体系として認識することはできないはずである。

われわれはグリーンにおいて時間的意識と永遠的意識との二重意識が問題になっていることを知ることができる。われわれの注意と関心はこの両意識の関係に向けられる。この関係はさきに見たように永遠的意識を主体にして時間的意識を考えようとする立体的関係である。グリーンの課題はこの底辺にあるところの永遠的意識の実現にある。この実現は決して容易ではない。何となれば時間的意識が人間の意識の表面をカバーしており、そのために永遠的意識の顕現が妨げられるからである。これが強くなれば、われわれは意識を時間的意識としてのみ考える傾向になり、永遠的意識を存在しないものと考えやすくなるであろう。グリーンは永遠的意識の自己実現は動物有機体を手段にすることによって可能であると考え、かれにおいてはこのような意味において両者は関係しているのである。グリーンは「動物有機体の諸変容を通してわれわれにおいて実現されあるいはわれわれに対して伝達される限り」⁽¹⁷⁾ といっており、「世界を知ろうとするわれわれの学習の過程においては時間にその歴史をもっている動物有機体は永遠に完全な意識の手段となる」⁽¹⁸⁾ ともいっている。動物有機体は永遠意識が顕現される媒介者である。人間は一面動物有機体とみられるが、他面永遠意識の主体である。動物有機体としての人間は感情、感覚、印象といった面からみられた人間であると考えられる。それは時間の側面からみられた人間である。永遠的意識は時間的意識としての動物有機体に自己を実現すべく積極的にはたらきかけない限り、永遠的意識は人間の内において消極的にとどまるであろう。グリーンは人間性においてはたらきかけるもの（能動的なもの）とはたらきかけられるもの（受動的なもの）とを区別しつつ認めている。永遠的意識は前者であり、動物有機体は後者である。「はたらきかけるもの」は理性の能動作用とみてよいと考えられる。しかるにそれが特に「永遠的意識」とよばれなければならないのは何故であろうか。「永遠」の意味は何であろうか。グリーンは永遠を不変と同じ意味に考えており、またそれを恒常ともみている。要するに、かれは人間性の内に変化しないものを認め、これを知識の源とみる。それ故、動物有機体は変るもの、一定しないものであることがわかる。変るもの、一定しないものはグリーンにおいては感覚的なものである。動物有機体は「刺戟に対して新たに反作用する様式」⁽¹⁹⁾ を生み出すものであり、「感覚的生活の有機的過程」⁽²⁰⁾ である。それは要するに刺戟と反応とを経験内容とするものであって「身体」にたとえられる。これに対して永遠的意識は身体に宿るところの魂にたとえられる。身体は感覚的生活を営む外的組織である。身体はその中に宿る魂の積極的作用がなければ死に等しい。魂は身体の中で且つこれ

を手段にしつつ作用するように、永遠的意識も動物有機体を通して且つこれを媒介にすることによって自己を再現する。

永遠的意識は人間の根源的要求であり、熱望であるようにみれる。それは動物有機体（感覚的生活者）の中に生きているが、ここに埋没しているようなものではない。それは感覚の影響によって妨害されるけれども、絶えず感覚や刺激に対してはたらきかけ、それに左右されないで自己を実現する主体的精神である。だから永遠的意識の再現、It is never ending, still beginning⁽²¹⁾といわれている。このような始と終りとをもたない永遠的意識は何を要求し、何を熱望するのであろうか。グリーンはそれを知識の源とみているのであるから、それは確実なる知識を求める意識であることがわかる。われわれが知識を求めるのは何故であるか、またそうした活動の源は何であると考えられているか。これに対して生活の要求、興味、虚栄などが答えとなってくることが予想される。これのみが知識探究の源であるとすれば、グリーンの永遠的意識は理解できない。生活の要求、興味、虚栄などから起る知識探究には限界があるようにみえる。それは「決して終りもしないし、尚も始まりつつある」ような作用ではない。永遠的意識は「一つの完成された知識」（あるいはこれは「知識の無限の統一」とも考えられる）を目的とする。従ってそれは上記にのべた限界を超えようとする。この努力がなければそれが「感覚的生活にはたらきかける」という言葉の意味は理解できない。このはたらきかけが容易でないから永遠的意識は「漸次」実現されなければならないわけである。従って知識も漸次完成されてゆくものと考えられる。永遠的意識は感覚にはたらきかけつつ、思惟と感覚との統一を漸次可能としつつ、知識を確実にしてゆく。「われわれが人間的知識の貯えとよぶものへの付加の点においてであろうと、個人がその貯えのある部分を専有することの点においてであろうと、真の叡智におけるあらゆる前進は感覚の連続的報告、注意の連続的努力、観察と実験の連続的過程が意識（すべての事物が関係した一つの全体を形成するという意識）によって――すなわちそれらの連続を通して作用し、そして同時にそれらを通して自己を実現する意識によって決定されるという仮定にもとづいてのみ説明される」⁽²²⁾。

意識が全体的統一作用をもっていることの例証としてグリーンは文章の理解過程をあげている。われわれが書物を読むとき、一語一語の意味を確かめ、そしてはじめて一つの文章の意味を理解することができる。そしてつぎの文章との関連において前の文章を理解し、かくして書物全体の内容を理解することができる。このような思考と理解とができるのは統一的意識が作用しているからである。われわれが読書し、観察し、著述するときものを全体的に考える意識が作用する。部分だけを取りあげて考察するならば、それと全体との関係が考えられないからその部分を十分理解したとはいえない。さらに、われわれがものを論理的に記述するとき構想力が作用する。すなわち文章を組立てる骨子がいくつか考え出されなければならない、ものを見てそれについて考え方を表現するときでも、その事柄なり問題をいろいろな角度から思惟し、かくして指摘される問題点を総合的に考える能力（「すべての事物が関係した一つの全体を形成する意識」）がはたらかないならば、公平な見方を樹立することはできない。グリーンは文章を理解するとき、

このような統一的意識が作用するという。「文章を読むときわれわれは言葉を連続的に見る、われわれはそれらに対して連続的に注意する、われわれはそれらの意味を絶えず思い出す、しかしその連続を通してその文章が全体として一つの意味をもっているという意識が絶えず現存しなければならない、そうでなければ連続的視覚、連続的注意、連続的回想はその意味が何であるかを理解することにならないであろう。」⁽²³⁾

Ⅲ 自我と自由

知識は自由な知的活動によって得られる、知的活動は自我意識に裏づけられる、そしてこの自我意識は自由でなければならない、自由とは何であろうか、それは人間自身のあり方および作用を示す言葉であると考えられる、「人間自身」とはこの私自身のことであり、主体的な自己自身である、この私自身がどのような状態にあるとき、あるいはどのようなはたらきをするとき、自由であるといえるのであろうか、グリーンは自由を自我の作用の面からとらえている、かれによると自由の第一条件は self-distinction である、これは人間自身を他者から区別する作用である、われわれがものを知るためにはかかる区別の意識によって諸事物を比較し、それらの相違およびそれらの事物とわれわれ自身との相違を知らなければならない、諸事物なり人々を同じものとしてのみとらえることは真の知の始まりとはいえない、同じだといえるためには相違点もすでに知られていなければならないはずである、self-distinction ができるためには自己自身が動揺しない何ものかを必要とするように考えられる、われわれは区別する作用によって因果関係とか法則関係を知ることができるようにみえる、自由の第二の条件は人間が結合し、統一する作用をもっていることにある、区別によって諸事物の部分間の相違点が理解される、それぞれ違った部分だけを知ることができても、それらが全体としてどのように前後相関連するのかということがわからなければ、無秩序な部分が眼前に見えるにすぎない、そこで、結合し、統一する作用が人間の内にはたらくことによってものを全体的にかつ秩序あるものとして知ることができる、これら結合と区別、総合と分析という作用はわれわれが事物や、人間を深く認識してゆけばゆくほど内から自然に起るようにみえる、グリーンは人間を深く見ることによって自由の二つの条件を自我に自ずから備っているはたらきとみようとする、そしてこれらの作用は決して抽象的なものではなくて具体的事物に即応しつつはたらく、「統一原理はそれ自身をそれが結合する多様性から区別すべきであることは実際統一の条件である、しかし多様性が統一原理から離れてそれ自身の本性をもつとか、この原理がそれが多様な世界との関係においてもっているものから離れて別のそれ自身の本性をもっているとか、と想定されてはならない、統一原理を離れては多様な世界は何物でもないであろう、そしてその世界から自己を区別することによって統一原理はその性格をその世界からとり出すのである」⁽²⁴⁾。

自由は雑多な諸現象の連続の中には見出されない、また、自由は変化する世界の中にも見出されない、要するに自由は「自然的生成の連鎖」においては発見されない、それでは自由はどこにおいて発見されるのであろうか、自由は発見されるものではなくて実は意識されるものである、では自由はどのようにして意識されるのであろうか、われわれの意識はすでに考察したように感

覚や印象からくる意識で満されている。したがってわれわれの知的活動の源はこのような感覚的意識にあると考えられやすい。グリーンにおいてはかかる意識は時間的意識である。自由はこのような意識から独立した自我にその根源をもっている、とグリーンは考える。人間は時間の中に生きていて、感覚や情念から絶えず制約を受けている。かれは意識の流れに従って刻々に変化する。このような流れの変化からどのようにして独立した自我が存在すると考えられるのであろうか。それは人間が自己自身を感覚から影響されないものとして自己自身を保持することにある。それは自我を感覚の諸経験から分離することによって可能である。分離のはたらきがあるからこそ self-distinction も可能なのであろう。また分離によって人は事物を冷静に考えることができる。かくして自由の前提は自我の分離作用にあるということが出来る。「感覚の多様性がわれわれにとって結合された系列として示され、かくしてそれらの間の結合の諸条件を求めるべくわれわれを動かすのはわれわれが自己自身をいわば感覚の多様性から離し、それらの多様性を通して不変的として保持することによってのみである。そしてさらに、かかる諸条件の概念に到達したとき、われわれが諸条件を不変の法則によってその変化の中で結合されるものとして考えることができるのは自我を同じくその諸経験の連続から分離することによってのみである。……」⁽²¹⁾。

一体、何故かかる自我の分離作用が自由の前提にならなければならないのであろうか。第一に、人間は見たり、聞いたりする感覚的経験によって自己自身の思考方向を間違いやすい。われわれの判断、意志、行為はこれらの感覚によって左右されやすい。われわれは感覚、情念、印象によって左右されないことも可能である。それはわれわれの内にこれらの作用に抵抗し、反作用することによって自己自身を保持しかつ貫こうとする独立的なあるものが存するからである。グリーンはこれを自我とよんだ。われわれが自己自身の意識の動きを深く観察してみると、われわれが外的刺激によって起る感情や情念によって左右されるのはかかる情念の支配の外にわれわれが立つことができないからである。われわれは他人の言動や環境によって左右されやすいけれども、この場合左右しているものは実は自己自身であることが忘れられていることもある。しかるに人は自己を左右しているものは他人の言動や環境であると考えがちである。われわれはここに混同がなされていることを知る必要がある。グリーンが「われわれはわれわれ自身でなければならない」という主張は以上のように考察することによって理解される。グリーンの自我は表面的なわれわれ、すなわち感情的に動揺しやすい自我を脱し、一定した、不変の自我を意味し、この自我が自由の基礎概念をなしている。グリーンはかかる自我を punctum stans⁽²⁶⁾ といっている。

以上の考察からわれわれは自由の基礎をなしている自我が自立的なものであることを知る。グリーンは自我の独自の、固有の作用を self-origination とよんでいる。自由とはかかる作用である。「かくして知識の達成にわれわれの視野を依然として制限しながら、われわれはつぎのように云う資格がある。人間自身、すなわちそれによってかれが自我であると同時にかかるものとして自己自身を区別するところのあの原理については、人間は自由な活動——すなわち、時間の中になく、自然的生成の連鎖の中の一つの輪でもなく、それ自身以外の先行者をもたないで自から

方位づけられる (self-originated) 活動をなしている」と⁽²⁷⁾。

self-origination とはいかなる作用であろうか。これは行為の自律性を意味しているのであろうか、それとも判断の自律性を意味しているのであろうか。ここでは知識の形而上学が問題になっているのであるから、上記の作用は判断の基礎をなす自我の活動であることになる。Origination という語はものごとの始まりまたは出発点を意味するから、それは知的活動の源をさしているといえることができる。この根源に立脚して自我の独自の知的活動が展開される。グリーンは自我のこの活動を「自然的生成の連鎖」との対比におい考えるから、後者とは違ったものとして self-origination を示す。両者は厳密に区別されなければならない。グリーンは self-distinction という語を用いるが、これは「自然的生成の連鎖」の一つの輪として自我を意味するのではなくてこれとは異なったものとしての自我の区別作用を明らかにするために使用されたものである。さらに self-distinction は自我が自己自身を自然の過程の外に, out of the succession, すなわち、時間における諸過程の外に保持することを意味する。この見方は自我を永遠と時との両観点から考える見方でもある。グリーンの self-origination は以上のような意味において理解され得る。

ひるがえってわれわれがものを知る過程はどのようなになっているのであろうか。われわれが諸事物を理解しようとするとき、まずわれわれは自己を客観的場におき、自己を冷静にすることを要求される。そうでなければ諸事物は偏して理解され、一面的知識となる。またわれわれは諸事物や人間について理解しようとするとき、その一部分を観察して他の部分を十分吟味することなく終ることによってそれらについて十分知識を得たと考えるときもある。これはわれわれが事物や人間について総合的全体的に考えることを怠るためか、あるいはこうした全体的思考が忘れられているためかのいずれかであろう。あるいはこのような思考への努力がなされていないためであろう。グリーンが「感覚の多様性の統一」を主張するのは以上のように考えることによって理解される。しかし実際において総合的全体的思考がなされ難いのは何故であろうか。とくに人間を対象として考えるとき、かかる思考が困難となりやすいのは何故であろうか。その大きな理由の一つとしてわれわれは感情ないしは情念をあげることができる。人間は感情によって公正な判断を弱めやすくあるいは印象から起る嫌悪によって誤った先入観をもって他の人々を判断しがちである。これらの自然的作用は人間において抑制され難く、人が人に直面する瞬間において意識されることなくすではたらきかけ、歪められた意識において対話と思考とが進められる。そこでこのような感情から自己を分離し、自己を不変のものとして保持することは事物や人間を理解するときには不可欠となる。この意味においてグリーンの自我の概念はよりよく理解できるようにみえる。グリーンは feeling, moment, succession という語をしばしば用いるが、それはこれらの自然的作用との対決において自我が考えられているからである。われわれはグリーンの自由を検討すればするほどその基礎をなしている自我の根本的性格を吟味せざるを得ない。

グリーンの哲学においては人間の根底に宇宙的精神が存在し、これが自我にはたらきかけることによって自我の知的活動が真に展開されるものとされている。自我の背後にあって自我の活動を正しく方位づけるこの精神は mind とよばれる。それは感覚的意識とは独立した客観的宇宙精

神である。これがすでに問題にされてきた self-originating する作用の根源である。グリーンは「宇宙において自から方向づける『精神』の作用」⁽²⁸⁾ といっているし、また「世界についてのわれわれの意識における感覚の多様性の統一は世界のある諸過程を通してこの精神がわれわれの中で自己を実現することを含んでいる……」⁽²⁹⁾ ともいっている。グリーンにおいては宇宙的精神が自己を実現することによってはじめて諸感覚の雑多な多様性が統一される。われわれはこの精神がわれわれ自身の内において作用するのを自から知るとき真理を発見する軌道に乗せられるようにみえる。この精神は永遠に作用してやまないものと考えられるが、人間の内にはこの作用を制限するものがある。グリーンの知識形而上学の根本問題はここに根ざしている。

IV 永遠的意識の問題

グリーンの形而上学の根本問題は永遠的意識の自己実現にある。かれがこれを主張するようになったのはアリストテレスの「デ・アニマ」に見られる思想から影響されたからである。アリストテレスのこの著作の中で言及されているアナクサゴラスの「精神」がグリーンの「精神」に影響を与えた。グリーンは「倫理学序説」の中でつぎの言葉を引用している。「そこで精神は、アナクサゴラスが云っているように、それが諸事物を支配するためには、すなわちそれが諸事物を知るためには他の何ものとも混同されてはならない」³⁰⁾。アナクサゴラスの「精神」は純粹の精神であり、独立した精神である。それは「他の何ものとも混同されてはならない」といわれるからである。「他の何もの」とは何を意味するのであろうか。グリーンの思想からみればそれは感情として受けとれるかもしれない。それは事物を知る原理としてのヌース以外のものではあるが、アナクサゴラスはそれをどのように考えているのであろうか。この点についての疑問を解決するためにB. ラッセルのつぎの一文が注目される。「アナクサゴラスはヌースを、生ける諸事物の構成に入り、そしてこれらを死せる物質から区別するところの実体としてみなす点においてかれの先輩たちとは違っている。すべてのものにはヌースの外にすべてのものの構成部分がある、そしてあるものはヌースを含んでいる、とかれはいう。精神は生命をもつすべての事物を支配する力をもっている。それは無限であり、自から支配し、何ものとも混同されない」⁽³¹⁾。これから考えるとアナクサゴラスにおいてはすべての事物はその構成要素としてヌースとヌース以外のものを含んでいることがわかる。そしてヌースを含む諸事物は生きた諸事物である。ヌース以外の要素から成る諸事物とは何であろうか。それは「死せる物質」であろうか。この点は明確に理解されない。ラッセルの記述によるとアナクサゴラスの精神（ヌース）は「物理的变化の第一原因」であり、「すべての運動の源」であり、「一定不変」である。グリーンの永遠的意識はこのような性格を有するヌースに近い。グリーンがアナクサゴラスの思想に関心をもった理由がわれわれにとって理解できるように思う。しかしアナクサゴラスは科学的合理主義者であり、「かれは倫理学や宗教について多く考えたようにはみえない、恐らくかれは、かれの告発者が主張したように、無神論者であったであろう」⁽³²⁾ といわれている以上、グリーン、道徳や宗教に深い関心をもっているグリーンがどの程度アナクサゴラスの思想に共鳴したかは疑問である。

グリーンが永遠的意識を強調するといえはわれわれはグリーンがスピノザといかなる関係にあ

るのかと問わざるを得ない。スピノザの「永遠の相の下に」という思想がグリーンに影響を与えているかどうかという問題はわれわれにとって興味がある。グリーンは「倫理学序説」の中ではスピノザにふれていないけれどもこの著作の序文を E. ケアードが書き、この序文の中でグリーンとスピノザとの関連を指摘している。「グリーンは著作はこの対立を説明しようとする試みとして、そしてとくに永遠の相の下 (sub specie aeternitatis) にある人間の概念が時間の相の下 (sub specie temporis) にある人間についてのわれわれの見解の基礎として考えられてよいことを示そうとする試みといってよい。しかしこの統一への適当な表現形式、相対立した誤謬の形式、すなわち神の中で人間を見失うところの神秘主義か、それとも神と世界とに対する人間の関係を忘れる個人主義かのいずれかに落ちいらない表現形式を見出すことは決して容易ではない。グリーンは少なくともこれら両方の面を絶えず考慮に入れてきたけれども、『人間を神とよぶべきか動物とよぶべきかという疑問』に永久にとどまる中道を越えることができた」³³⁾。これはあくまでもケアードのグリーン観であってグリーン自身がこの見方に一致するかどうかは問題であるかもしれない。グリーン自身は「倫理学序説」の中ではスピノザにふれてはいない。またかれがスピノザの思想から影響されたと考えられる直接の言葉も見出すことはできない。ただ「政治義務の諸原理」の中ではスピノザの政治思想にはふれている。この点を考えればグリーンとスピノザとの関連は認められる。「倫理学序説」に展開されている思想を冷静に考えるとき、確かにケアードのいうように自我実現は永久的自我の実現であるから「永遠の相の下に」という思想に近い考え方が貫かれている。グリーンは永遠的意識ともいっているのであるから、かれは永遠と時間との関係を意識を中心にして考えていたということができる。

このように考えてきてこの関係がのべられている文をあげるならばつぎの一、二の文が適例かと思われる。「それら（意識における対象または事実の関係）は永遠的宇宙——そしてそれは精神的宇宙または意識の宇宙である——の一部分として個人が眠っていようと目を覚ましていようと、心を取り乱していようと注意深くしていようと、無知であろうと知っていようと、それら（諸事実の関係）に向う個人の態度の諸変化を通じて存在しなければならない」³⁴⁾。「そこでわれわれは漸次達成した知識の対象を形成する事実の諸関係がすでにそして永遠に存在しなければならない意識があること、そして個人の成長する知識はこの意識に向っての進歩であることを主張しなければならない」³⁵⁾。知識を得るためにこのような意識が果して必要なのであろうか。われわれがものを知る過程を考えてみるとかかる意識とは無関係に感覚と知性によって事物についての知識を得ているようにみえる。そこには永遠的意識は作用していないようにみえる。察するに、永遠的意識は完全なるものにふれる意識であるとも考えられる。感覚によって得られた知識は、感覚が完全なるものにふれることを妨害しやすいために、不完全であることがある。それは永遠的意識がわれわれにおいて十分発揮されないからである。一体、永遠的意識はわれわれ人間において果して自己再現することができるのであろうか。またわれわれはこれをいかにして知ることができるのか。世界がかかる意識を起させる源ともいべき精神を含んでいるとすれば、これをわれわれに保証させ、確信させるものは何であらうか。グリーンはこのような疑問を抱か

なかったのであろうか。「世界が含んでいる精神が何故いやすくも世界において自己自身を現わすのであろうか、何故それはその世界の諸過程を諸制限（かかる諸器官の使用はこれらの諸制限を含んでいる）の下で自己自身の再現になるよう有機的にするのか、——これらは恐らくこれらの諸制限のためにわれわれが質問をさけることも答えることもできない質問である、それは不思議なようにみえるけれどもそうであるということによって満足しなければならない、事態のすべての事実と一緒に考えるならば、われわれは他の方法でそれらを表現することはできない」⁽³⁶⁾。

以上われわれはグリーンの哲学を知識形而上学の側面から考察した。かれの哲学の根本問題はどこにあったであろうか。もとよりそれは知識を可能にする原理の探究にあったが、これを追求すればするほどかれにおいては永遠者と有限者との交流が間類にされずにはおれなかった。有限的時間的自我が何故永遠者に接近してゆかねばならなかったのであろうか。グリーンの哲学の出発点にはつぎの問いがあり、これが知識形而上学の底流をなしているようにみえる。この問いとは人間の感覚によって得られた知識は真といえるに十分であろうか。真の知識を得ることを妨げるものは何であるか。これは人間の感情や情念ではないであろうか。このように問うことによってグリーンはこれらの感覚的作用から脱し、自由な精神を保持し、これにもとづいた精神的活動を知識の源とみるのである。しかしこの活動が永遠的意識といかに関連するかは尚問題として残るようにみえる。察するにグリーンが永遠的意識を重視したのはつぎのような理由によるのではないとも考えられる。永遠的意識は完全を求める意識、真理を求める意識であるとみることができるならば、これを追求する努力（またはエロース）において知識は次第に確実なものとして開かれてくる。真理を目標とした知的努力が知識の源となるのであって、これを見失った人間は感覚の印象によって左右され、得られた知識も断片的となるにすぎない。グリーンがロックやヒュームの経験論を克服しようとしたことはよくわかるし、そのために永遠的意識の再現が重視されたことも理解できるが、経験論的風土の強いイギリスにおいてどの程度かれの哲学が理解されたかは疑問のようにみえる。グリーン死後分析哲学や論理実証主義の論理学が次第に支配的となったのはそのためであると見ることができる。

註

(1) T. H. Green, *Prolegomena to Ethics*, 1883, *Impression of 1924*, pp. 23, 39,

(2) *Ibid.* p. 39

(3) *Ibid.* p. 40

(4) *Ibid.* pp. 24, 37

(5) *Ibid.* p. 37

(6) *Ibid.* p. 51

(7) *Ibid.* p. 51

(8) *Ibid.* p. 42

(9) *Ibid.* p. 53

(10) グリーンは関係の概念として「運動と物質」(*Ibid.* p. 13), 「実体」(*Ibid.* p. 59), 「原因と結果」(*Ibid.* p. 60) をあげている。

- (11) Ibid. p. 55
- (12) Ibid. p. 23
- (13) Ibid. p. 13
- (14) Ibid. p. 47
- (15) Ibid. p. 59
- (16) Ibid. p. 78
- (17) Ibid. p. 78
- (18) Ibid. p. 77
- (19) Ibid. p. 79
- (20) Ibid. p. 20
- (21) Ibid. p. 83
- (22) Ibid. p. 81
- (23) Ibid. p. 81
- (24) Ibid. pp. 86~87
- (25) Ibid. p. 92
- (26) 西晋一郎氏はこれを「止立点」と訳し、友枝高彦氏は「静止点」と訳した。
- (27) T. H. Green, *Prolegomena to Ethics*. pp. 92~93
- (28) Ibid. p. 88
- (29) Ibid. p. 93
- (30) Bertrand Russell, *History of Western Philosophy*, 1946, Eighth Impression 1962, p. 79
- (31) Ibid. p. 80
- (32) Ibid. p. 80
- (33) T. H. Green, *Prolegomena*. Preface. p. VII
- (34) Ibid. p. 80
- (35) Ibid. p. 80
- (36) Ibid. p. 93